〔民俗編Part 19〕

あるじでん

No.38

世田谷区教育委員会　民家園係
〒157-0067 世田谷区喜多見5-27-14
◎ 次大夫堀公園民家園
☎ 03(3417)8492
◎ 岡本公園民家園
☎ 03(3709)6959

平成13年3月31日　発行

雑木林と農家の仕事

写真1　雑木林のある風景（次大夫堀公園民家園）

一目見てそれと分かる農家の屋敷構えをもった家は、今ではすっかり少なくなってしまいました。世田谷区の場合、昭和45（1970）年に1,135戸存在した農家は、平成7（1995）年には529戸と大きく減少しています。そして、区内に広く見られた「草葺の民家」、「水田」、「畑」、「雑木林」といった武蔵野の農村風景も、急速に失われていきました。

これら失われつつあるもののなかで、特に雑木林（平地林）は武蔵野を代表する美しい自然の景観として、たびたび文学作品などで取り上げられ紹介されてきました。しかしながら、農家にとっての雑木林は単なる自然景観ではなく、むしろ水田や畑と同様に生活の基盤として欠かせない存在であったといえるのです。このことについて、今回は解説してみたいと思います。

1 雑木林の成り立ち

武蔵野は荒川と多摩川にはさまれた台地で、世田谷区域の大部分がその範囲に含まれています。この武蔵野台地において、はやくから集落が成立したのは、台地の周縁部や小河川沿いなど、水の便のよいところです。

しかし、水に恵まれないうえに作物の栽培には不向きな土壌に覆われた台地内部は、近隣の村々から牛馬の飼料にする秣、屋根葺きの材料の萱そして食糧となる野草などの採草地として利用されるにすぎませんでした。当然、畑や集落もほとんどなく、そこにはススキやオギの生い茂った草野に小木を交えた原野が存在するのみでした。

行く末は　空もひとつの　武蔵野に
　　草の原より　いづる月影

（自分の進んでゆく野の果ては空も一体になって見える武蔵野だがその草原の果てから月が昇り始めているよ）

— 摂政太政大臣

鎌倉時代の『新古今和歌集』（1205年成立）に収められたこの歌には、果てしなくつづく草原の情景が詠み込まれ、いまから800年ほど前の武蔵野には一面の野原が広がっていたことを伺わせます。

しかし、江戸時代になると武蔵野でも新田の開発が進められ、広大な原野は一変して農村地帯へと変貌を遂げます。「果てしなくつづく草原」は人の手によって計画的に開発され、広い道路や畑・宅地へと姿を変えていったのです。

また、開墾された農地には、新たにクヌギ、コナラ、アカマツなどの木々もたくさん植えられていました。こうして、武蔵野に雑木林が次々と人工的につくり上げられていったのです。

では、なぜ農地を開拓するのに、わざわざ木を植えて雑木林をつくる必要があったのでしょうか。

雑木林は、冬の強い季節風による耕地の風害を防ぎ、落葉からは肥料が作られて痩せた畑の土を肥やすのに使われます。さらに、成長して15年も経た樹木は伐採され、薪や炭となってエネルギーを供給する機能ももっています。

つまり、雑木林は、防風林として農地や集落を保護する機能から、農作業や日常生活において様々な資材を供給する農用林の役割までも果たしているのです[註1]。言い換えれば、雑木林は農家生活や農業生産と密接した存在として、必要不可欠であったと言えるでしょう。それ故に、人々はクヌギやコナラの管理・育成に努めてきたのです。

実は、わたしたちが目にすることのできる武蔵野の雑木林の多くは、江戸時代に入って原野を開拓する過程で育成され、現在に至ったものなのです。まさしく雑木林は、生活の必要上から農家の人たちによってつくり上げられた人工林であると言えるでしょう。

以下では、かつて農家が冬に行っていた労働で、雑木林と関わり合いの深い作業を紹介してみます。

写真２　武蔵野の新田集落の畑と雑木林（埼玉県入間郡三芳町上富）

2 雑木林と農家のくらし

(1) 雑木林の冬　—12月—

田に比べて畑の多い世田谷区域では、サツマイモ・サトイモ・ニンジン・キュウリ・大根といったさまざまな野菜が１年を通して耕地に植えられていました。大根の収穫が終わり畑仕事が一段落する12月になると、いよいよ雑木林での仕事がスタートします。

まず最初に、林床（雑木林の地表面）に生えている低木や下草を刈り取ったり、間伐したり、あるいは枯れ枝を拾い集める作業が行われます[註2]。

鎌や鋸を使って中腰で行わなければならなかったうえに、たいへん力のいる作業だったので重労働を強いられましたが、集めた草木は自宅に持ち帰れば自家用の燃料になります。さらに、下草のなかでも萱は保存しておけば屋根葺きの材料となるので、これらの仕事をこなすことは、たとえつらくても暮らしの上で非常に意味のあることでした。また、これを行わないとその後に行われる落葉の採取ができなくなってしまうので、まずはこうした作業をこなしておく必要があったのです。

(2) 落葉から畑の土をつくる　—12月～１月—

これらの作業が終わると、いよいよ「クズハキ(屑掃き)」とか「シバハキ(柴掃き)」などと呼ばれる落葉採取がはじまります。厚く一面に積み重なった落葉を熊手でかき集め、大きな竹篭につめて家まで運んでいきます。雪が降り積もると落葉はとたんに湿って重たくなり、掃き集めて運ぶことが難しくなるので、クズハキの作業は雪の日が増える２月の中旬までには終わらせておく必要がありました。

こうして12月から１月にかけて毎日のように集められた落葉の多くは、屋敷の庭か畑の隅に高く積み上げられて肥料の材料にされました。世田谷の農家には肥料をためておくための小屋（堆肥小屋）を持つ家もありましたが、多くの場合は野積みにしておいて、

写真３　雑木林で集められた枯れ枝と落葉
（埼玉県所沢市下富）

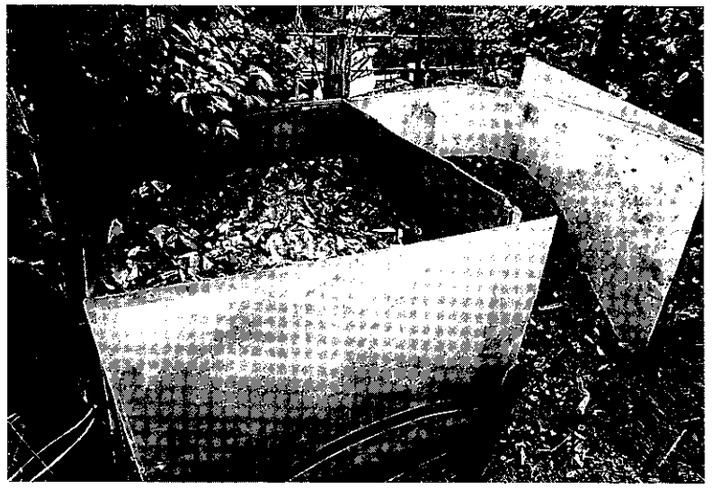

写真４　畑の隅に集められた落葉（大蔵６丁目）

写真５　堆肥づくりの様子（次大夫堀公園民家園）

いっしょにドブの水や糞尿をかけて、落葉をその場で腐らせるようにしました。途中、細かく刻んだ藁や残飯を混ぜながら何度も切り返し（天地返し）をしていくと、やがて落葉は完全に発酵して堆肥と呼ばれる肥料になります。

このほか、家畜を飼っていた農家では、落葉を畜舎に運び入れ牛馬に踏ませておきました。すると牛馬の糞尿と混じり合って、厩肥と呼ばれる良い肥料が作られました。

先に述べたように、世田谷の農家は昔から色々な作物を畑につくってきました。当然、限られた農地から年に何度も作物を収穫するには、大量の肥料を必要とします。そのため、農家ではさまざまな種類の肥料を用いてきましたが、なかでもよく使用されたのは、人（牛馬）の糞尿と堆肥であったといいます。したがって、農作業の合間に大量の落葉をかき集めて堆肥をつくっておくことは、農家の経営を支える重要な仕事だったのです。

(3)　落葉で苗を育てる
—２月～３月—

落葉は肥料の材料となるだけでなく竈や風呂の燃料にもなりますが、農作業におけるもうひとつの利用方法に苗床（温床）づくりがあります。苗床は野菜類の苗を育てるための温床で、昔ながらの踏み込み温床では大量の落葉が必要とされます[註3]。

苗床を囲う枠には色々な物が使用されます。昔ながらの方法でつくられた苗床では、写真６の藁を用いたものがあります。まず、長方形になるように四隅に杭を打ってから、その間に一定の間隔で杭を打ち付けていきます。次に横に真竹を２段ほど渡して、半折りにした稲藁を縦に差し込み回りを囲みます。これが古くから行われてきた温床枠のつくり方でしたが、写真７のように、やがて藁の代わりに畳を半分に切ったものなども使われるようになりました。

世田谷区内のある農家では、枠に藁や畳ではなく木の板を用いた苗床が作られていました。他の苗床とは異なり、枠の上には、保温用にガラス障子がはめこまれています。大きさは東西２間～６間（約3.6～10.8m）、南北６尺（約1.8m）の長方形で、写真８のように南面の高さを低くして日当りを良くする工夫がなされています。

この家では、苗床の枠ができると、まずその中にヤマ（雑木林）で集めたクズッパ（落葉）を大量に積み込んで、次にすべてを均一に踏み込んでいきます。こうして踏み込まれると、高さ30～60cmの枠から溢れんばかりの状態にあった落葉は、５cm足らずの厚さになります。その上に細かく刻んだ稲藁を20cmくらいの厚さに敷き、さらにその上に米糠をむらのないように撒いて、苗床がビショビショになるくらい水を充分に撒きます。そして、何度も切り返しながらこれらのものをよくかき混ぜたら、全体を踏み込んで平らにしていきます。最後にしっかりと踏み込まれた藁と落葉の表面に、土を15cmくらいの厚さに敷いて、人か牛

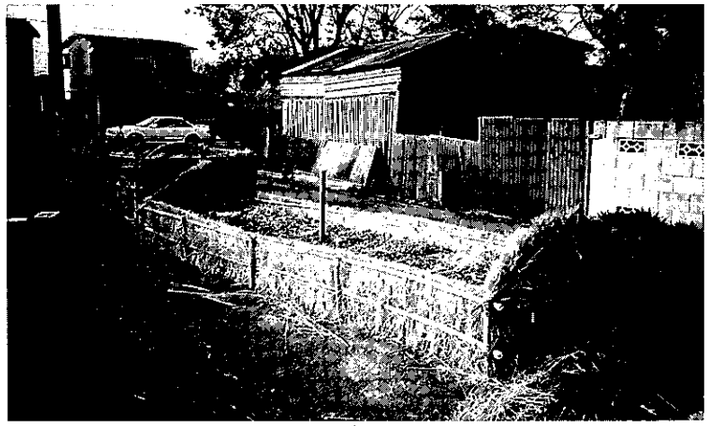

写真６　枠に藁を用いた苗床（埼玉県与野市円阿弥）
※ビニールシートが用いられるようになる以前は、苗床の保温用に上に菰や萱で屋根を作って枠の上に被せていました。

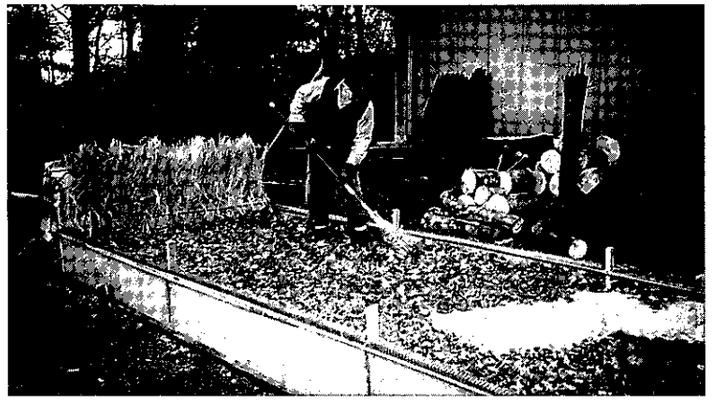

写真７　枠に畳を用いた苗床（埼玉県浦和市三室）

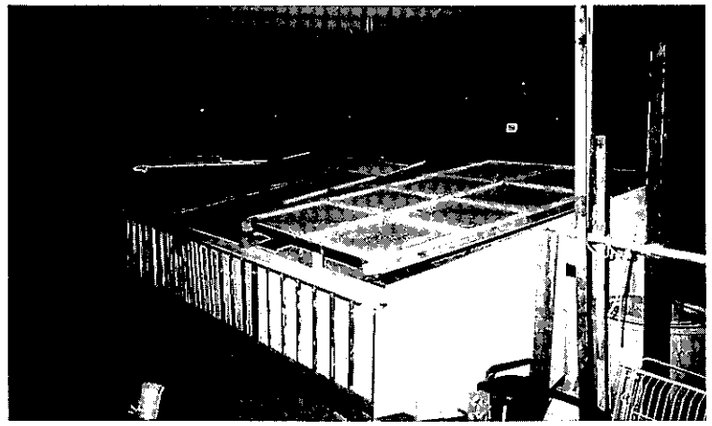

写真８　枠に木の板を用いた苗床（埼玉県与野市円阿弥）
※枠の高さは南側に低く、北側を高くしてあり、苗の陽当りを良くしています。温床枠の上には、保温用の障子が被せてあります。

馬の糞尿をかけておきます。

最終的に落葉と藁が発酵して25～30℃の温度になる苗床ができれば、しっかりとした良い苗を育てることができるといいます。しかし、これより低い温度では苗が丈夫に育たず、高い温度では苗がフケッて（腐って）育たないので、入れる落葉などの材料の配分や踏み込み方、水分の加減に、多くの経験と知識が要求される仕事でした。苗床の準備をはじめる時期は地域や農家によって異なりますが、区内では１月の終わりの頃から３月はじめの時期にかけて行われていたようです。

世田谷区域では、トマト・ナス・キュウリ・カボチャ・サツマイモなどの作物について苗床を用いた栽培が行われていました。３月に入ってから、順次苗床にこれらの種を播いていき、彼岸入り前の時期になってサツマイモの種芋を伏せ込み（植え付け）ます。

苗床に種を播いてからも、その管理には気を抜けませんでした。人によっては寒中であっても、薄手のシャツ一枚の姿で作業を行ったといいます。こうすることで、どの程度冷たいか、あるいは熱いかを苗床から肌で感じ取ることができ、微妙な温度調整が行えるのだというのです。

例えば、サツマイモは「苗半作」とも「苗七分作」とも言われるように、野菜作りでは苗づくりがうまくいくか否かで、その年の夏の収穫が決まると言えます[註4]。確かに、苗床づくりは大変な労力を必要としましたが、霜の降りる寒い時期でも苗床の土は温かいので、早い時節から安定して苗を栽培することが可能になるのです。

現在では電熱温床が普及して伝統的な踏み込み温床は世田谷でもほとんど見られなくなってしまいました。しかしながら、かつては雑木林の落葉を使った苗床が、夏の野菜をつくるために大切な役割を果たしていたことは間違いありません。

写真９　現代における世田谷の苗床（瀬田５丁目）

※ビニールハウスの中に苗床が設けられ、床土の下には電熱線が導入されています。

(4)　木を伐って雑木林を守る
—３月～４月—

苗床での野菜の苗づくりがはじまり彼岸も近くなると、冬の間に行われる雑木林での作業は終わりに近づきます。落葉採取を終えてから３月上旬にかけてのこの期間には、クヌギやコナラの伐採が行われました。

武蔵野の農家では、15年から20年くらいに成長した木々を次々に伐採して薪や炭の材料を採取します。中でもクヌギやコナラは火持ちが良く、この時期にしか取れない貴重な燃料でした。農家によっては、伐採した木から自家用の燃料をつくるだけでなく、薪や炭を都市に売りに行ったり、山師に立木のまま売却することで現金収入も得ることができました。

このように薪炭を作るために木を伐ったからといって、農家が雑木林を破壊しているわけではありません。むしろ、伐採作業は雑木林を守る上で重要なことでした。雑木林の木々は、30年も経つと衰えて、やがて立ち枯れてしまいます。そのために、農家では20年のうちに木を伐り萌芽更新して、新芽を大事に育てていったのです[註5]。

落葉採取の終わる２月から３月の上旬までの期間に伐木を行うことにも、雑木林を守る上での配慮があります。この時期はちょうど木々の成長休止期にあたり伐採しても問題ないが、もし彼岸を過ぎて伐れば新芽の芽吹きが悪くなり、樹木の生育に良くないことを人々が認識していたからなのです。

間伐、クズハキ（落葉採取）、伐採、これら冬の間に行う作業を通して、人々は雑木林から恵みを得ると同時に、雑木林を整備したり保全してきたのです。

写真10　長火鉢と囲炉裏（次大夫堀公園民家園）

※手前の火鉢では炭、奥の囲炉裏では薪が燃やされています。

（註１）農用林

農家の生活や農業生産と結びついた林野のことを「農用林」と言います。

（註２）間伐

主だった木々の生育を良くしたり、採光を良くするために、適当な間隔で木を伐採する作業を間伐と言います。雑木林では、クヌギとかコナラのような木を残して、そのほかの雑然と生えているエゴノキやハンノキを伐採しました。間伐は雑木林を管理し守るためにも欠かせない作業でした。

（註３）温床

苗を安定して早く育てるために土を暖かくした苗床。苗を作る温床は踏み込み温床と電熱温床があります。前者は伝統的につくられてきた苗床で、踏み込まれた落葉の発酵熱が熱源となります。後者は現代になって用いられるようになったもので、電熱線が熱源となります。

（註４）「苗半作」「苗七分作」

育苗（いくびょう）が甘藷（かんしょ）栽培の半分、あるいは７割を占めるほど重要な作業であるという意味。サツマイモは苗の出来、不出来によって、その年の収穫量が左右されると言われています。

（註５）萌芽更新

伐採した木の切り株から新芽を吹かせて、古木から若木に生まれ変わらせることを言います。

＊参考文献

徳　冨　蘆　花　1933年　『自然と人生』　岩波文庫
徳　冨　健次郎　1938年　『みみずのたはごと』　岩波文庫
国木田　独　歩　1939年　『武蔵野』　岩波文庫
犬　井　　正　1992年　『関東平野の平地林』　古今書院
市　川　健　夫　1999年　『風の文化誌』　古今書院
大　舘　勝　治　2000年　『民俗からの発想
ー雑木林のあるくらし・地域と子どもたちの原風景ー』　幹書房
樋　口　忠　彦　2000年　『郊外の風景　ー江戸から東京へー』　教育出版

区文化財資料調査員　北田建二

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています